

幼児生活団幼稚園

コロナ禍にある幼稚園生活

栗原美枝子

集団生活を初めて行う幼稚園はコロナ禍で今までにない工夫をしながら送ってきた。人との繋がりを思うようにできない状況の中で幼児の成長に欠かすことのできない経験を一つでも多く、また子育てをしている保護者が孤立しないように子育て支援をどのように行っていくべきかを模索しながらの日々を過ごしてきた。

I. 保育環境整備

密にならないように保育室の使い方には十分気を付けて行った。

2021年度は、3学年の保育室は、多目的に使用するホールと保育室②と③を開け広げた保育室と保育室①の3か所を使用した。

2022年度は、各保育室を一部屋ずつ使用。ホールは2クラス合同のお食事、音楽、美術、雨天時の運動等多目的に使えるようにした。

登降園の際は、学年が入り交わらないように入出口の動線を決め、一クラス(6才組)は10分遅れての降園で対応した。

登園後は手洗いをしっかりと行ってから、園生活を始めた。

園児の生活は密を避けることは不可能である。幼児の大事な成長期間である3年間は、人との関わりを通して様々な体験をして育っていくのである。登園してきた子ども達には、思いきり友達と一緒に遊び、先生とのスキンシップをとりながら信頼関係を築いていく。コロナ禍でもこれらの点を決しておろそかにしないように進めてきた。

しかし職員や子ども達の健康を保証することも大事な役割である。感染対策として、幼児と密に過ごす職員に対してはマスク着用をすること。園児に対しては各ご家庭での判断とした。子どもによっては、マスクをしていることが当たり前になっていて、先生がマスクをとるように促しても、とることが出来ない状況もあった。特に激しい運動遊びや気温が高くなった時には、マスクを外すことを優先とした。

II. 食事作り

職員と保護者とのお食事作りは再開したが、盛り付けまで台所で行い、子ども達が自分たちで盛り付けをすることはやめた。おかわりも職員がまわって配るようにした。一人ずつの席で食べ進めることから少なからず緊張感が漂ってしまう雰囲気であった。BGMを流しながら食べ進め気持ちを和らげていった。

2021年度は各クラスで食べていたが、2022年度からは4才組は保育室、5、6才組はホールで食べることにした。少しにぎやかになり飛沫感染を予防しながら楽しい時間となりつつある。

III. 保護者の働き

生活団では、保護者の働きをきっかけに保護者同士が集まり、互いに子育ての悩みを話したり自分の子どもだけではなくクラスの子も達をみんなで見守っていくことが出来、良い関わりとなっていた。

コロナ禍になり、園に集まって活動していくことが出来ず、各家庭に持ち帰り個人で進めなくては行けなくなっていた。その影響で孤立(孤独)を感じてしまう保護者が出てきていた。担任は子どもだけではなくその背後にある保護者の気持ちを受け止めることを忘れずに保育を行ってきた。電話やノート、時には面談のお声がけをして、なるべく密に連絡を取るよう努力してきた。

IV. オンラインでのやりとり

2021年度の保護者会は、ZOOMで行っていた。顔を見ながらの会ではあるが幼児を持つ親である保護者同士、先生との話し合いや連携・親睦を深めるという時間にはオンラインでは難しいと感じた。

2022年度は感染対策をしながら、対面で保護者会を行った。幼児を持つ保護者に対しては、細かい説明や

過程などを丁寧に話さなくては伝わらないので、対面の重要性を対面に戻したことでよくわかった。

V.カリキュラムの工夫

幼児にとっては、歌を歌ったり体を動かして遊ぶ、人とのコミュニケーション、スキンシップ、どれ一つ除くことは出来ない。大事な3年間の成長に関係する。朝、みんなが集まったら「おはよう」のあいさつをしてみんなで朝の歌や賛美歌を歌う。

これらのことを崩さずに生活をしていくことにした。優しい声で歌うことを伝え、一方向を向いて歌ってきた。

入園式や卒園式においても、曲数は減らしたが子ども達の歌声を聴いていただいた。

クリスマスの降誕劇も、一生懸命練習してきたものを保護者の方々に見ていただき一緒にイエス様のお誕生をお祝いしたくて、人数制限はしたが記念講堂で行った。

2021年度子ども達はマスク着用で行ったが2022年度はマスクを外して行った。

運動面でもボール、竹馬、砂場用具等、みんなで使いまわすものではあるが制限せずに子ども達の遊びたい気持ちを大切に行っていた。遊んだ後はしっかりと手洗いを行うことを徹底した。